

東日本大震災における「仙台市災害多言語支援センター」の取り組み vol.1

(財) 仙台国際交流協会

2011年3月11日に発生した大地震。(財) 仙台国際交流協会(以下、SIRA)は、その日の夜から外国人被災者のために必要な情報を収集し、多言語化して提供する「仙台市災害多言語支援センター」(以下、支援センター)の運営を開始しました。(活動の詳細については『自治体国際化フォーラム8月号』記事「東日本大震災の外国人被災者支援～仙台市災害多言語支援センターの活動から」をご覧ください。)

地元FM局からの多言語情報発信～日頃の関係が力を発揮～

地震発生直後、私たちが支援センターの運営を開始する前に行なったことがありました。それは、地元FM局であるDate fm(株式会社エフエム仙台)での多言語による災害情報の発信でした。Date fmとは防災情報番組の提供で日頃から協働し「顔の見える関係」を築いていたので、当日はDate fmと電話連絡も取れない状態でしたが、私たちはとにかくDate fmのスタジオに向かうことにしたのです。



地震発生後のDate fmでのミーティング

スタジオには、SIRAスタッフだけではなく、「仙台市災害時言語ボランティア」(以下、言語ボランティア)に登録している留学生も一緒に向かいました。私たちは放送で読み上げる内容をスタジオに向かいながら考えなくてはなりませんでした。言語ボランティアの協力のおかげで迅速に翻訳し、放送することができました。

言語ボランティアと停電のなかで支援センターを立ち上げ

その後、泊まり込みで支援センターの運営が始まりました。支援センターは2日間停電していたので、私たちは懐中電灯を天井に照らしながら運営の体制を整えました。支援センターで使用する電話は、一回線だけが通話できる状態でした。問い合わせの電話は深夜3時ころからありました。海外メディアからの取材が多かったことを覚えています。言語ボランティアの留学生も一緒に泊まり込み、電話対応をしてくれました。深夜にも断続的に余震があり、私たちの不安はおのずと大きくなりましたが、留学生たちの何気ない会話が私たちの不安を和らげてくれました。また、支援センターのインターネット回線が使用で



停電の支援センターでの活動(震災2日目)

きない中で、私物のスマートフォンでインターネットに接続できたので、かろうじて被災地外への情報発信することや、メディアの情報を得ることができました。しかし、当日の深夜にはすでにその電源も切れかかっていた。そんな時に「事務室のノートパソコンにはバッテリーの電源が残っているはず。そこから充電をすると良いですよ。」と留学生がアドバイスをくれました。通信機器に明るい、若い留学生ならではの機転だと感心させられたことを覚えています。

自らも被災者である言語ボランティアが多方面で活躍

翌朝からはさらに多くの言語ボランティアが支援センターに駆けつけてくれました。翌日以降も、公共交通機関も復旧しておらず、ガソリンの供給不足で交通手段の確保もままならない中で、連日支援センターに来てくださる方もいました。

また、地域の避難所運営に関わっている等の事情で支援センターに来ることができない言語ボランティアも、Email を通じて翻訳に協力をいただきました。その他にも、地域の被災状況や外国人被災者について支援センターに情報提供くださる言語ボランティアもいらっしゃいました。



翻訳する言語ボランティアのみなさん
(震災4日目)

今後の課題はさらなる「連携・協働・ネットワークづくり」

支援センターが運営を終了する4月30日までの51日間に支援センターで活動して下さった言語ボランティアは、実にのべ184人にのぼりました。支援センターの運営は言語ボランティアの協力がなくては決してなし得ませんでした。

さる6月4日に、言語ボランティアのみなさんや関係者で「ラウンドテーブル」を開催し、支援センターでの活動を振り返りました。参加した言語ボランティアからは「領事館や県警等との情報共有がもっと必要だった」、「大学や日本語学校との連携がもっと必要だ」といった意見がありました。SIRAではこれまでも災害に備えたネットワークづくりを図ってきましたが、今後は今回の反省を踏まえつつ、さらに関係機関との連携・協働・ネットワークづくりを推進し、災害につよい街づくりに貢献して行きたいと考えています。



「仙台市災害時言語ボランティア・ラウンドテーブル」の様子